

立命館大学校友会東日本大震災復興支援事業  
東北ツアー福島Cコース レポート  
2012年10月13日～14日

『何かあったら遠くへ逃げなさい』、祖母の教えでした」。

「関西県外避難者の会 福島フォーラム」代表、遠藤雅彦さんの言葉が胸に突き刺さる。

遠藤さんの故郷、いわき市豊間地区は、津波によって根こそぎ生活が奪われた。家々の土台だけが無残な姿を晒し、そこに花々が描かれているが、亡くなられた方々に対する哀悼と共に、破壊し尽くされた大地への鎮めを感じられ、メディアから得た印象を遥かに超えるリアリティに打ちのめされた。

東京出身の私の下宿先は、千中近くの元お女郎屋さん。昨年6月の校友会総会で、福島状況を報告されたのが福島県校友会の三村智春幹事長であり、30年近く前、同じ屋根の下で暮らした先輩だった。いつかは訪ねたいと思いつつ日常に追われる中、今回のツアーは、まさしく天啓だった。

遠藤さん、三村さんをはじめとする福島県校友会の皆さん、スパリゾートハワイアンズの下山田敏博総支配、アクアマリンふくしまでのレクチャー。どのお話からも決してあきらめずに困難に立ち向かうことの大切さ、家族や仲間たちへの感謝の気持ちが伝わってくる。地震、津波、原発事故という未曾有の多重災害に遭難したとは思えないほどの穏やかな語り口に、真に心が強いということは、こういうことなのだと思感させられた。

苦難は、何の前触れもなくやってくる。人間も文明も存外弱いものである。だからこそ、先人の知恵に耳を傾け、現場に足を運び、当事者から学ばなければならない。災害は耳をそむけ、目を塞ぎたくなることばかりだ。しかしながら、人間の尊厳と心根の美しさも発露する。

今回のツアーを企画運営された校友の皆さんには、お礼の言葉が見つからない。参加されたメンバーも目的意識が高く、多くの刺激を受けた。復興への道程は緒に着いたばかりだ。忘れずに想いを寄せ、長期的な支援をすることが肝要である。そして、自らが災害に遭遇した時、現地で感じとったことや教訓を活かすことこそ被災された全ての方々への鎮魂であると思ふ。

平成元年経済学部卒 東京都出身 望月行夫

スパリゾートハワイアンズ 下山田敏博総支配

- ・2011年3月11日、東日本大震災発生、原発事故を伴う
- ・未だに6万人が県外、95000人が県内で避難生活をしている(5000人しか戻っていない)
- ・地震発生時の14時46分は、関東各地への送迎バスの出発時間14分前
- ・震度6弱、1000名の宿泊客、1500名がプール、300名の従業員がいた
- ・情報がない状況かであったが、ライフラインが生きており、1000名が5日間過ごせる食料があった
- ・3月12日、自ら東京へ車を走らせ、途中のコンビニやトイレの場所を調べる
- ・3月13日、630名の帰宅困難な客に対し手持ちのバスは9台しかなかったが、更に9台を手配して出発
- ・売店にある食料品を配布し、バスの車列の前後に車で挟み、13時間かけて東京に到着
- ・風呂の提供、布団の貸し出し、炊き出しなどを行う
- ・3月14日、福島第一原発水素爆発
- ・4月11日、同様の余震があり、断層上のプールなど建物が破損
- ・休業状態の中、ハウステンボスより従業員の研修の提案がある
- ・5月23日～9月21日、延べ30000人の広野町町民を受け入れ、後日、3本の桜を寄贈される
- ・5月3日～9月30日、フラガールが125箇所257回の公演キャラバン、一回りも二回りも大きくなって帰還
- ・10月1日、プールを除く、フルオープン
- ・2012年2月8日、モノスタワー開業
- ・2012年5月、震災前の稼働率に戻る

以上、キキトリ:望月行夫